資料③

**子ども・若者支援のための連携により、就業又は修学等に結びつけた事例**

| 分野 | 構成機関名 | 事例 |
|---|---|---|
| 雇用 | ジョブカフェ SAGA | ヤングハローワーク SAGA、さが若者サポートステーションと、随時連携し支援を行っている。 |
| | 産業技術学院 | 直接就業に結び付いた連携事例は把握していないが、高校生向けの合同説明会への出展や各種イベントへの出展という形で他の機関と連携した活動は行っている。 |
| 教育 | 学校教育課<br>生徒支援室 | Aは小学校5年生で、2学期末に欠席が増えた。休みの理由を確認すると、母親が弁当の日は休ませる、入浴させていないから欠席、文化発表会の日は登校させない等母親が欠席をさせている状況であった。Aも母親に学校に行きたいと言っても無駄だと思い、諦めてしまっている状況であった。<br>学校はスクールソーシャルワーカー（以下SSW）へ相談し、今後の対応を検討した。SSWは、家庭の支援として祖母を通して母親に福祉課や生活保護課の他、母親が通う医療機関、Aが利用している放課後等デイサービス等との連携を伝えてもらい、関係機関との連携を図った。また、Aの朝食が取れているかという懸念や給食が1日の栄養摂取に欠かせない状況も有り、子ども宅食での食糧支援に繋いだ。<br>母親の医療機関との連携では、母の受診促進や状態改善のために、医療ソーシャルワーカーと母親又は祖母が相談できる体制を整えた。その後、生活保護課と医療ソーシャルワーカーの連携も可能になり、一体的な支援体制ができた。<br>学校では、教員とSSWの役割分担を行い、Aは体験型学習等、可能な範囲で授業参加できるようになり、成長した姿が見られるようになった。<br>このような支援を行う中で、Aはその後欠席が減り、登校できるようになった。 |
| 矯正・更生保護 | 少年サポートセンター | ＜事例1＞<br>非行を犯し、高等学校を退学となった少年を、当センターで継続歩道を実施。少年は「将来は、スポーツ関係 |

| 分野 | 構成機関名 | 事例 |
| --- | --- | --- |
| | 少年サポートセンター | のトレーナーになりたいが高校を退学したので、専門学校に行けるかどうかわからない」という困り感を持っていたことから、特定非営利活動法人スチューデント・サポート・フェイスへ少年を繋ぎ、高等学校卒業程度認定試験へ向けて学習支援を受けている。<br><br>＜事例2＞<br>　いじめ被害を受け、精神疾患を患い、家出や自殺企図等の行動のあった少年に対し継続的支援を実施。当センターでは少年に対する精神面の支援、生命、身体の保護に関する対応を行い、転学に関する支援は特定非営利活動法人スチューデント・サポート・フェイスが行うなど役割分担をし、連携した支援活動を行った。<br>　少年は、通信制高等学校への転学を果たし、現在は自己のペースで高等学校へ通っている。<br><br>＜事例3＞<br>　いじめ被害を受け、実父との関係が悪く、家出や刃物持出等の行動のあった少年に対し、当センターより継続補導を実施していたところ、就労に関する困り感を持っていたことから、特定非営利活動法人スチューデント・サポート・フェイスへ少年を繋ぎ、就労支援に向けた面接を定期的に実施している。 |
| CSO | 親の会「ほっとケーキ」 | 　若者サポートステーションとの連携で、若者が就業につながろうとしている事例がある。<br><br>　スチューデント・サポート・フェイスのスタッフから、親の会への紹介があり、親の会に参加された保護者の方の家庭の空気が変わって、子どもとの会話も増えたとの報告があった。 |

| 分野 | 構成機関名 | 事例 |
| --- | --- | --- |
| CSO | 特定非営利活動法人スチューデント・サポート・フェイス | 1.子育て不安、DV 被害、ひきこもり、自傷他害のリスク等多重に困難を抱える家庭<br>（a）支援開始時の当事者の年代・性別、成育歴・家族構成<br>相談者 A（30 代）、夫 B(40 代)、子 C（保育園）、相談者の妹 D（20 代）<br><br>（b）事例の概要<br>行政機関からの紹介。10 代からひきこもる妹 D の自立支援を主訴に訪れた A。面談を繰り返すうちに A 自身の子育て不安や夫 B からの DV 被害について告白。40 代でひきこもり状態にある B は、精神障害者手帳２級を取得しているものの医療機関との関係性が崩れ、自己判断による服薬中断の状態にあり、A への DV、リストカットによる自傷行為、元職場の同僚への殺害予告等脅迫行為に及ぶ。B は警察や行政外郭団体での勤務経験を有しており、支援関係者の心理状態や行動様式を熟知しているため、電話・メール履歴の確認、録音や何台ものカメラによる 24 時間の監視、口止め等を行う一方、日本刀による物品の破壊や自身のリストカットの画像等を送り付けるなど、巧妙に家族や関係者の心理を支配することで通報・通告を回避しており、深刻化を遂げていた。<br><br>（c）支援の成果<br>センター及び指定支援機関として関連窓口と共に多職種のチームを編成。警察、医療機関、保健福祉事務所、社会福祉協議会、保育園等との情報共有、ケース検討会議を開催。24 時間の連絡手段の確保と隠語の設定等徹底した安全管理を行った上で、脅迫等の対象になっている専門機関の担当者にも広げ情報収集と分析。送信された写真の画角の違い等で通報・通告された際に誰から漏れたのかが特定出来るよう緻密に計算されていること、警察や児相介入時の心中の計画等も判明。関係機関と再度共有を図ると共にケース検 |

| 分野 | 構成機関名 | 事例 |
| --- | --- | --- |
| CSO | 特定非営利活動法人スチューデント・サポート・フェイス | 討会議を開催。センター及び指定支援機関としての支援方針の提示。緊急時の対策や支援介入が難しかった場合の代替策について協議。A 及び C、D の保護等徹底した安全管理と B に対する別角度からの接点形成等事前準備を実施。専門機関の担当者に対するリストカットの画像送信を機に現地警察、OB 等が見守る中で B に対するアウトリーチを実施。B との関係性の構築に成功。警察等との連携による危機管理体制の構築。保育園や現地 NPO 等との連携による A 及び C の見守り体制の確立等を実施した後、関与継続型のアウトリーチの実施。B 自身が幼少期からの虐待経験を有すること、警察や行政機関、外郭団体でのパワハラを経験していること、元同僚らが裏切り行為や煽り行為を行っていたこと等が判明。B に対するカウンセリング、心理教育、転院支援、服薬指導によるメンタルヘルスの安定化。元職場、元同僚らとの関係調整及び目標の再設定による専門機関等に対する負の感情の改善。任意団体の立ち上げ等を通じた就労支援。同時並行的に多職種チームの役割分担による A 及び C に対する家族支援、D に対する自立支援アプローチを実施。その結果、A に対する DV はアウトリーチ介入後一切認められず、現地 NPO 等の子育て支援の導入により C の子育て不安も解消。D も S.S.F.主催の適応支援プログラムに参加するなど完全ひきこもり状態から脱却。B は設立した任意団体による社会貢献活動を開始後、精神科医による就労許可、年度内に就職が決定。報告書作成時現在も就労が継続している。 |

| 分野 | 構成機関名 | 事例 |
| --- | --- | --- |
| CSO | 特定非営利活動法人スチューデント・サポート・フェイス | 2. 不登校からオンラインギャンブル依存に陥った事例<br>（a）支援開始時の当事者の年代・性別、成育歴・家族構成<br>両親（40 代）、A（10 代後半）、弟（中学生）<br><br>（b）事例の概要<br>幼少期から A に対する両親、特に母親の期待が強くピアノや塾、そろばんなど多くの習い事を経験。中学受験を経て私立の中学校に進学。中学時から、起立性調節障害により遅刻が増え、学力が低下し幼少期からの習い事について母親を責めたて家庭内暴力も発生するようになる。父親との関係は、希薄となりほとんど口を利かない状況。県立高校進学後、高校 2 年 1 学期から起立性調節障害が増悪し不登校となる。そのころから、オンラインゲームへの依存が強くなり昼夜逆転の生活を送る。本人の将来を心配した母親から当センターに相談が入る。<br><br>（c）支援の成果<br>母親との初回面談では、「とにかく、学校に戻るように説得して欲しい。」と学校に対する強い思い入れを語られる。母親の許可を得て学校に連絡を取り、学校でのケース会議を実施。SSW が窓口となり学校との協力関係を調整した。本人支援にあたっては、本人との関係性が保たれている部活動の担当教員に協力を取り付け、協同でアウトリーチを実施し定期的な本人支援を実施することが可能となる。アウトリーチによる心理面での支援や学習支援を実施しながら家族関係の調整に向けて、母親と本人に心理教育を実施した。本人との関係性を構築する中で、通信制高校転学の希望を聞き取る。母親は転学に消極的であったため、通信制高校の情報を提示しながら、学校に万が一復学できなかった際の最終手段としての転学について同意を得たほか、本人にも可能な限り単位を取得した上での転学のために学校復帰に向けても学校と協同でアプローチを |

| 分野 | 構成機関名 | 事例 |
| --- | --- | --- |
| CSO | 特定非営利活動法人スチューデント・サポート・フェイス | 実施。A が支援員と学習を始めた様子を見て、母親の態度も軟化し通信制高校に転学することが可能となった。通信制高校転学後、A のひきこもりがちな生活に改善が見え、集団での学習支援やアルバイトに向けたセミナー活動にも積極的に参加し、飲食店でのアルバイトも開始するなど生活状況の改善が見られた。<br>　しかし、高校 3 年生に進級し過去の友人たちが偏差値の高い有名大学を志望していることを耳にしたことから、A に将来の不安や焦りから精神的に不安定な面が見られるようになる。支援員による対応頻度も増やしカウンセリング的な対応をする中で、中学時の友人から進められた、オンラインカジノに数十万円のお金をつぎ込んでいることが判明する。A に聞き取りから、将来に対する不安を紛らわすために始めたこと、友人が数十万円稼いでおりその友人に習いながらはじめは勝てていたこと、しかし自制が効かなくなり負け込んでいること、自分でもやめた方がいいと思っているが自分の力だけでは難しいことが語られる。また、進路についてもどうしても有名な大学に進学しなければならないという強迫観念から苦しくなっていることが語られる。A の孤立した状況から再度つながりを取り戻すために、アルバイト就労後、来ることが難しくなっていた集団活動に参加するようにしたほか、A の許可を得たうえで母親とも情報を共有し医療機関受診に向けて調整を行った。その結果、医療機関でも治療を受けながら集団活動を実施し徐々にオンラインカジノにのめりこむ時間は減少した。その後、受験をしたものの希望する大学には不合格。しばらく、アルバイトをしながら資金をため、卒業後 2 年後から一人暮らしを始める。将来に向けて、求職者支援制度に申し込み、PC 関係の資格を取得した。現在正社員就労に向けて、サポステと協働で対応しているほか、通信制大学進学に向けて準備中である。 |